

2018. 10. 25 (木)

「自由な社会」を想像する

赤江達也

はじめに

マックス・ウェーバーは、宗教社会学を立ち上げた先駆者でもあります。そのウェーバーが著書『宗教社会学』の冒頭で、自分は「宗教音痴」である、説教が聴きたい人は教会へ行くように、と書いています。

宗教音痴というのは、宗教が不得意であることを意味しています。その告白を文字どおりに受けとることができるかどうかは、なんともいえません。ともかくウェーバーは宗教音痴という自虐的(?)なスタンスを宣言することで、宗教と社会学のあいだの微妙な距離を浮かび上がらせているわけです。

それは教会と大学という場所のちがいでもあります。そういうわけで、わたしは今年の春に関西学院大学にきて、社会学部のなかにもチャペル専用のたてものがあることに驚きました。このチャペルの時間と空間には、日本のキリスト教主義大学の歴史が織り込まれています。そのような場所でお話できることをうれしく思います。

「自由」の想像力とその限界

まず、共通テーマである「よりよい社会」とはどういう社会なのか、という問いについ

てですが、近代の主要な理念として自由と平等が挙げられます。「より自由な社会」や「より平等な社会」というのは、近代の重要な目標となってきました。ただ、たとえば「自由」というときに人びとがイメージする内容は、大きく変化してきました。

アメリカの歴史家リン・ハント(Lynn Hunt)が、その著書『人権を創造する(Inventing Human Rights)』のなかで、あるエピソードを紹介しています。アメリカ独立宣言の作者で、第三代大統領となるトーマス・ジェファーソンは、一九世紀初めの時点で考えるかぎり最大の「自由の程度」を訴えました。その「自由」にはアメリカ先住民の政治参加やアフリカ系アメリカ人の「奴隷の権利」さえもふくまれていました。しかし、そのジェファーソンですら、女性が政治に参加するような政治体制を思い描くことができなかったというのです。

ジェファーソンは今から200年ほど前、1826年に亡くなっています。その時点では、ジェファーソンだけではなく、アメリカやヨーロッパのほとんどの人びとは、女性が政治参加をするという可能性について思い描くことができなかったのです。

ただ、ジェファーソンが語った「自由」の理念のなかには、ジェファーソン自身は気が

ついていなかったかもしれませんが、女性の政治参加という可能性、ポテンシャルがふくまれていました。その意味で、近代は「自由」という理念のポテンシャルがすこしずつ発見されていくプロセスであったということもできます。

日本の場合には、1925年の普通選挙法によって、25歳以上の男性は（お金持ちでなくても）投票することができるようになります。しかし、女性に選挙権が認められるようになるのは、敗戦後の1945年のことでした。つまり、日本では、ふつうの成人男性が投票できるようになってからまだ100年もたっており、成人女性が投票できるようになってから70年あまりしかたっていないわけです。

選挙や政治参加だけではありません。たとえば、女性が大学にいった勉強するということも、日本ではまだ100年とすこしぐらいの歴史しかありません。1913年に東北帝国大学で女性の合格者が発表された、というのが最初のような感じです。このような日本の歴史もまた、ジェファーソンが語ったような近代の「自由」の理念が、時間をかけて、すこしずつその範囲を広げていったプロセスとして考えることができます。

アメリカ独立宣言を書いたジェファーソンですら、女性の政治参加を思い描くことができなかったというエピソードは、わたしたち自身の「自由」について考える手がかりになります。つまり、わたしたちが考える「自由」も、100年後とか200年後からみれば、とても制約された「不自由なもの」にみえるかもしれない、ということです。

わたしたちは、自分たちをとて「自由」な存在であると感じているかもしれません。

しかし、それと同じような「自由」を受けとることができない状況や人びとも存在しています。そうした状況や人びとについて調べたり、「より自由な社会」を思い描いたりすることは、社会学の重要な課題だと思えます。

「ためらい」が引き起こした大事件

それでは、「自由な社会」を想像するにはどうすればよいのでしょうか。

きょう提案してみたいのは、自分のちょっとした感覚を観察してみる、という方法です。ちょっと「嫌な感じ」がする、といったささやかな違和感が、ときにより大きな文脈へとつながっていくことがあります。そのような観点から、明治時代の内村鑑三不敬事件についてお話ししたいと思います。

内村鑑三不敬事件は、日本の近代国家が形成されていく過程で起こったもっとも有名な事件のひとつです。日本近代史ではほとんどかならず触られるので、高校の日本史や公民の授業などで聞いたことがあるかと思いますが、キリスト教徒の教師であった内村鑑三が、天皇が署名をした教育勅語に最敬礼をしなかった、天皇に対する「不敬」である、として激しい非難を浴びたできごとです。

この事件は多くの新聞や雑誌で報道され、キリスト教への批判が強まっていくきっかけとなりました。この事件によって学校をクビになった内村は、このとき29歳ですが、その後、自分の経験についての本を書きはじめ、宗教思想家として知られるようになります。この不敬事件は、内村が宗教思想家となっていく転換点でもありました。

一般的には、この事件の意義は、キリスト教徒がその信仰と良心にしたがって天皇にま

つわる儀式を拒否したことにある、と説明されてきました。それは大筋では正しいと思うのですが、ちょっと変なところがあります。

内村はこの事件のすぐ後にアメリカ人の友人に手紙を書いています。その英語の手紙のなかで、自分のふるまいは「拒否」ではなく「ためらい（躊躇）」であった、ということをつくりかえし強調しているのです。

天皇の儀式を「拒否」したと賞賛されている当の本人が「拒否ではなく、ためらいであった」と言うのだとすれば、ちょっと話が違ってきます。わたしは、内村が「ためらい」という表現にこだわっていたことには、かなり重要な意味があると思っています。

この事件が起こったとき、内村は、第一高等中学校（後の第一高等学校）の教師をしていました。事件のすこし前に、明治天皇の名前で教育勅語が発表され、天皇がサインをした教育勅語が第一高等中学校にも配布されました。そこで、始業式のなかで、教育勅語が与えられたことを祝う儀式がおこなわれることとなります。

儀式は、数人ずつ壇上にあがって教育勅語にむけてお辞儀をするというものでした。内村は、三番目に壇上にあがるのですが、そのときに、ちょっとためらって、それからいちおうお辞儀をしました。そのとき、生徒や教師のなかから非難の声があがります。十分に深いお辞儀ではないとして、内村にお辞儀をやりなおすように要求しました。

ところが、内村は、自分はもうお辞儀をしたのだからやりなおす必要はない、と主張して、やりなおしを拒否します。その結果、騒ぎが大きくなっていったのです。

数日後には、内村はお辞儀をやりなおすことに同意したとも言われています。ただ、そ

のとき内村は重い肺炎で寝込んでいました。そこでキリスト教徒の同僚が内村のかわりにやりなおすのですが、騒ぎは収まらず、内村と同僚は二人とも学校をクビになります。

なぜ内村はためらったのでしょうか。

その理由は、教頭先生の発言にありました。儀式を始めるにあたって、教頭がとつげん「宗教的低頭をせよ」と指示したのです。低頭というのは最敬礼の意味で、宗教的な最敬礼をしなさい、と言ったわけです。この教頭は内村と対立していたので、急な発言は内村への嫌がらせだったと考えられます。

この発言がなければどうだったでしょうか。内村たちはこの日になんらかの儀式があることを事前にある程度知っていました。キリスト教徒の他の教師二人は欠席しましたが、内村はあえて出席します。おそらくなんらかの儀式があるとして、内村はそれをするつもりだったと考えられます。

内村の事前の考えについては、ちがう見方もあります。主な先行研究では、キリスト教徒の内村鑑三はもともとお辞儀を拒否するつもりだった、と考えられてきました。しかし、わたしは、内村は儀式に出席し、皆と同じようにふるまうつもりだったと考えています。内村は事件の後も、お辞儀をすることはとくに問題がないと述べているからです。

ところが、儀式の最初に、教頭がこのお辞儀には「宗教的低頭」という意味があると言い出します。そのことによって、キリスト教徒として知られていた内村は、お辞儀をすることがむずかしくなったのです。

教頭先生の嫌がらせがあり、それがいわば成功して内村が「ためらった」ことによって、最初の不敬事件が起こります。それをきっかけに、キリスト教と「天皇を中心とする

国家」の学校教育が相容れないのではないが、キリスト教には問題があるのではないが、という議論が起こっていきます。

このような天皇の儀式は、次第に日本社会に広まっていきました。しかも、こうした儀式は、公式には「宗教ではない」という意味づけがなされます。「宗教ではない」のだから、明治憲法が定める「信教の自由」には抵触しないというわけです。

戦前の日本社会では、憲法で「信教の自由」を規定しながらも、学校での天皇の儀式や神社への集団参拝が広くおこなわれました。そして、キリスト教徒の教師や生徒たちも、そのような儀式に参加しました。そうした儀式は「宗教ではない」国民道徳なのだから、そのほかの宗教の信徒も当然参加すべきであると考えられたのです。

感覚を言語化するという方法

学校での天皇の儀式は、1945年の敗戦によって終わります。戦後になると、内村鑑三の評価も大きく変化しました。内村鑑三は、キリスト教信仰のもとで天皇の儀式を拒否したとして、高く評価されるようになります。

しかし、このような戦後の評価は、内村の考えとはすこしちがっています。先にも述べたように、おそらく事件の前も後も、お辞儀をすること自体は問題がないと内村は考えていました。そして、自分はお辞儀を「拒否」したのではなく、「ためらったのだ」と強調するのです。この微妙な主張の意義は、先行研究ではあまり重視されていません。

天皇の儀式を拒否することへの高い評価

は、どこかでそれを拒否すべきであるという考えをふくんでいます。しかし、内村は天皇の儀式を拒否しなければいけないという考えをもっていませんでした。ただ、学校の講堂で「宗教的な仕方用最敬礼しなさい」と言われたときに、なんか嫌だなと思って「ためらった」わけです。

内村が「ためらい」という言葉で表現した「嫌な感じ」は、内村を批判した人たちにも、内村を高く評価した人たちにも、あまり重視されませんでした。一方に、そういう儀式は当然実行すべきだと考える人がおり、他方で（とくに戦後には）そういう儀式は当然拒否すべきだと考える人がいます。ただ、内村はそのどちらの立場ともちがうところで、事件について考えていたのです。

不敬事件で学校をクビになった内村は、本を書いたり、論説を発表したりするようになります。そして、事件から約10年後に、自分の雑誌を創刊して「無教会主義」という独自の立場を語るようになります。そのプロセスは、不敬事件での「嫌な感じ」をすこしずつ言葉にしながらか、思想のかたちにしていったようにもみえます。

自分が「嫌なこと」や「好きなこと」に、じっくりと向き合い、言葉にしていくには、それなりに時間がかかります。大学はそのための場所でもあります。社会学部での学びを通して、みなさんがそれぞれに感じていることを言葉にしていくための知識や技術を身につけることを期待しています。それが「自由な社会」を想像するための方法でもあるからです。

(社会学部教授)